

ピューリタニズムとアメリカ文学(1) フォークナー 文学の場合

原口, 遼

<https://doi.org/10.15017/2332571>

出版情報 : 文學研究. 89, pp.141-161, 1992-03-25. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

ピューリタニズムとアメリカ文学

(1) フォークナー文学の場合

原 口 遼

以下は日本アメリカ文学会第30回記念大会（於・琉球大学：1991年10月26、7日）のシンポジウム部門における原口発表分の原稿に加筆したものである。

〔タイトルの発題理由〕 まず、この「ピューリタニズムとアメリカ文学」というシンポジウムを発題しました理由について申し上げます。発題したのは九州支部であります。私が九州支部を代表する形で全国大会の発題を任されてから、発題タイトルについてあれこれ考えてみましたが、まず日本アメリカ文学会の全国大会も、おめでたい事に今回で30回を数える事、従いまして、これといったテーマはこれまでに、あらかた取り上げられているといった事などから、私は過去のシンポジウムのタイトル一覧を調べてみたり、いろいろな叢書の類に当たってみたりして、何か良いテーマはないものかと考えて行きましたところ、意外にもこれまで取り上げられていなかった「ピューリタニズム」というテーマに逢着したわけであります。もう一つの理由は、九州支部では、毎年、研究テーマを一つ設定し、会員各自が毎月の例会でそれについて発表して行き、5月の支部大会（「九州アメリカ文学セミナー」）で総纏めをするといった形を取っておりますが、たまたま本年度のテーマが「ピューリタニズム」であったという事もございます。

パネリストの方々とはしましては、こうした思想方面の事を文学研究者が議論する場合には、とかく概念規定が曖昧になり擦れ違いの議論になりやすいので、特にお願ひしまして斯界の専門家をお呼びいたしました。それらの方々は同志

社大学の松山信直教授，国際キリスト教大学の大西直樹準教授，それに名古屋学院大学教授の Philip Williams 先生です。そして私は，たまたま4，5年前にハーバード大学で Sacvan Bercovitch 氏の Puritanism に関する講義を一年間受講し，また1989年度の札幌クールセミナーの「宗教と文学」と題するセッションで，そのお弟子さんの Andrew Delbanco 氏（コロンビア大学準教授）の警咳に接したという事，そしてピューリタニズム関係の事も一応人並みに齧っている者として，文学研究者がピューリタニズムに取り組む場合の問題，文学とピューリタニズムのタンジェントという事につきまして，話させて頂く事にしております。（松山，大西，ウィリアムズ氏，そして原口の順に発言）

〔19世紀アメリカ文学とピューリタニズム〕さて，私はここ何年か19世紀のアメリカ文学を少し齧っておりますが，Hawthorne (1804-1864)，Melville (1819-1891) それに Emily Dickinson (1830-1886) などは，キリスト教の教義がよく分かっていないと理解ができない。ホーソン，メルヴィルは松山先生がご担当下さいまして，先生はこれまでも，例えばピューリタン文学の暗さとか，或いは悪，罪といった基本的概念の現われについて書いておられ，¹ 今回もそうした作家達の著作の中から具体的文章を取り上げられまして，ピューリタン達の typological な思考方法の現われについて，それが思いのほか数多く見られるという事について，いわば“liberal typology”とでも呼ぶべき観点からご指摘になりました。一方，詩人のディキンソン等におきまして，そこに現われます「恩寵」の概念や，死の瞬間への強迫観念，それにまた死後の魂の「永世」についての観念などはまさしくピューリタニズムの教義の中核より発されて来ている種類のものであって，ディキンソン研究は，まずはキリスト教の教義を知る事からスタートすると言っても過言ではありません。

勿論，ディキンソン詩の理解には彼女の同時代人たる Emerson 等の transcendentalist 達の自然観，神観それに教会や儀式等への態度などが必須である事は，今や常識になっておりますが，それにしても Puritan Heritage は精密に調べられなくてはならない。²

[カトリシズムの教義と O'Connor 文学の理解] また私は南部の女流小説家が好きですが、例えば Flannery O'Connor などを読みますと、かなりショッキングで残酷な死や、信仰を求めてのヘンチキリンな難行苦行が描かれています。例えば、“A Good Man Is Hard to Find” の結末部とか、*Wise Blood* の Hazel Motes のマゾキスティクな苦行等々ですね。そして、それらは物の本に依りますと、神の「恩寵」の確かに存在するという事を（読者に）知らしめるためにそのような死が置かれ、難行苦行が行なわさせられているとされています。即ち、それはオコナーの神への信仰が常人離れして強烈だったからだなのだ、と。そして、確かにオコナー自身も彼女の評論集の *Mystery and Manners* や彼女の手紙などで、ピューリタンの土地柄である南部においてカトリック信者として小説を書く事へ覚悟みたいなものを、つまり自分は何よりもカトリック信者として書いているのだといった事を記し留めております。³ しかし、例えば、彼女の小説の暴力的結末においては、カトリックの神の「恩寵」の顕現が、従って信仰の大切さが示されているのだと説明されましても、実は分かったようで分からない。分からなければ仕方がない、と信者の立場からいわれればそれまでですが、私としましては、いやそうしたカトリックの信者の人達の理解の仕方は、作家自身の自作への説明に過度に共感的であって、典型的な “Intentional Fallacy” を犯していると考えなのです。私見によりますと、あれらはカトリック者の信仰を示しているのではなく、人物達のマゾキズム的苦行はむしろ神の恩寵なるものへの懐疑を表わしており、またああしたニヒルで暴力的結末は、むしろ彼女が「紅斑性狼瘡」（“lupus”）という父親譲りの死病を患い、人生への絶望的また否定的観方をしていた事の現われと取るのです。⁴ が、それにしても、議論を始めるにはまずもってピューリタニズムの事、カトリシズムの事を知らなくてはならないな、となるわけでありまして、ここでも宗教上の約束事をきちんと押さえないと、オコナー研究は大事なところで前へ進まないという事になります。つまり、たかが一作品の研究とはいいいましても、そうした教義方面の事を大きく迂回して来ないと十分な理解ができないという

事になりますから、文学研究は、特に宗教に関係した場合、ただ読めば分かるという事だけではない場合がありますので、時間がかかるわけです。

[Chopinの文学とLocal Colorism] 今度はKate Chopinの*The Awakening* (『目覚め』, 1899年刊)を読む場合の事を考えてみましょう。⁵『目覚め』は、これはアメリカ内陸部のケンタッキー州の文字通り草深い牧草地帯の田舎で、ピューリタニックなまた強権的な父親から支配され、抑圧された少女時代を送って来た女性Edna Pontelierが、そうした過去に反発するかのようにして、ニューオリンズのクリオール(カトリック系スペイン人やフランス人の子孫)の実業家に嫁ぎます。そしてエドナはその海浜地帯(舞台は主としてGrande Isle島)で、カトリックの人たちのsensuousな生き方、開放的な言動・行動にショックを受けながらも、自分も次第にそうした感覚方面の解放へと目覚めて行きます。そしてそうしたエピソードの流れの中で、女たらしの男(Arobin)に引掛かり、勿論、エロティシズムにも大いに目覚めるわけですが、結局一線を越え、また一方、権力的な夫とは違って、ロマンティックで、自分にかしづいてはくれるが、しかし純朴で煮え切らない年下の男(Robert Lebrun)との恋愛も成就せず、家庭生活上も大いに屈託があって、最後は早春の海浜に一人でかけて行き、浜辺で纏い物を脱ぎ捨て、全裸になり、絶望して、また見方によってはせいせいした気分で、海へ泳ぎ入って自殺するといった筋立てになっています。

実際、確かにここには明らかにアメリカの内陸部の抑圧的なピューリタニズムと、享樂的で感覚的な南国ニューオリンズのカトリックのクリオール達の生き方が対比的に描き取られておまして、その他に幾つかの対立項――例えば、ピューリタニズムの禁欲・抑圧 vs. カトリシズムの感覚性・解放性、当時の家族制度の封建性・拘束性 vs. 個人的・独立的生き方の自由と孤独、etc. ――が見つかりまして、特に、一方の項、即ち、抑圧的家父長制度、不当な結婚制度等への女性の側からの目覚めと抗議、反発といった図式が容易に見つかるものですから、Feminismの批評家達の好餌となっている事は、皆さんも先刻ご承

知の事と存じます。

しかし『目覚め』はそうまでして読まなくても、これは当時流行った一種の local colorism に「翔んでいる」女性の本音を乗つけた一種の風俗小説として読みますと結構面白く読めますので、こういった場合は、別段ピューリタニズムとかカトリシズムとかの教義・習慣上の違いを厳密に詳しく知る必要はありませんし、また、それらを調べ上げたからといって『目覚め』の世界の理解がヨリ深まるといったものでもありません。

或いは、エドナの間違いは、かなり野放図で際どい言語のコミュニケーションを行なっている、感覚的であけっぴろげの肉体的接触が一見許容されているかのようなクリオール社会では、実はそうした解放的行動様式が、逆に極めて窮屈な夫婦の絆や家庭生活上の安全弁として認められており（何よりもカトリックでは離婚が認められていません）、実際の所、彼らはエドナと違ってちっとも反体制的でも何でもなく、むしろ大いに保守的であったという、そうした社会によくありがちなパラドックスを、余所者のエドナがちゃんと見抜けなかった、そのための一つの間違いの悲劇、もしくは喜劇と捉える事もできます。そして、そのように理解するには、小説世界の行間の背後に横たわる現実を把握する力さえあればよいので、ピューリタニズムもしくは、カトリックの教義あるいはクリオール達の風俗習慣の相違をことさらに点検する必要性はないわけです。つまり、逆に言いますと、ピューリタニズムの教義・教説、習慣がよく分かったからといって、それはピューリタニズムというものがよく分かったというだけの事であって、それは文学（或いは人間）の理解に必ずしも資するものでない、といった場合も、勿論あるわけです。

[ピューリタニズムへのアプローチの多様さ] さて、話し変わりました今日のシンポジウムのメンバーを拜見致しますと、極めて多彩でございまして、パネラーがどういった基準で集められているのかと、訝しく思われている方々もおられるかと存じますが、当の私自身が驚いている次第であります。恐らく「ピューリタニズム」というタイトルを掲げて、そうしたシンポジウムが成功するため

には、例えば、三つ四つの形態が可能かと思われませんが、それは

①ひとつには大西先生のような、本格的なピューリタニズムの研究者が、数人パネラーになられまして、ピューリタン関係の文献の発掘、評価、もしくはある一つの思想の新しい意味付けをなさるといった形での、いうなればアメリカ史学会での一つの催しとして行なわれるという形態がありましょう。例えば、大西先生の今回のご発表のように、Perry Millerの“Errand into the Wilderness”（1952年発表）という論文およびその概念を廻って、その解釈が60年代、70年代を通じてBercovitch、Delbanco等々に代表されるように、彼らを取り巻く社会状況を反映して相当に変化して来ているのだ、といったご指摘にみられますように。

②あるいは、松山先生のような、例えばホーソン、メルヴィルについて極めて造詣の深い方々が3、4人パネラーになられまして、アメリカ文学史上の特定の一時期（例えば、1850年代）におけるピューリタニズムの具体的な現われとその特質等について突っ込んだ討議をするという形態が、もう一つございましょう。

③あるいは、Williams先生のように、何よりもキリスト教の信仰を中核に置いて文学というものをつえようとされる方々が、そうした敬虔な方々のお集まりになった場で、ご意見を交換されるという事がありえましょう。

④あるいは、私などのようにフォークナーならある程度五月雨的によく読んで来ているという者などの場合ならば、その各々の作品について、それぞれの論者がピューリタニズムの現われを点検し、なにがしかの結論を得るといった方向でのシンポジウムなら、参加できるでありましょう。

つまり Puritanism の検討と申しまして ①歴史学的・思想史な方法 ②時代を限ってその具体的な現れ方を検討する方法 ③文学作品における Theological な意味合いを抽出する方法 ④一作家を取り上げて、その作品群をピューリタニズムという角度から検討し直す... といった風に幾つか考えられると思われま

しかし、今回は、あたかもそういった別々の立場を代表するような人達が、ピューリタニズムと文学との関わりを述べて見るというわけですから、その意見はいわばあっちを見こっちを、乱反射のような体裁を取るのだろうと予測しております。

その事は逆に言いますと、「文学とピューリタニズム」というようなテーマの場合には、関心の持ち方からして、それほど多様なアプローチがどうしても生じてしまうということなのだと思います。

[意外に短いピューリタニズム時代] さらには、最近出ました Spengeman の *A Mirror for Americanists: Reflections on the Idea of American Literature* (1989年)⁶ 等の考え方によりますと、これはかなり挑発的な本ですが、そもそもアメリカ文学とはせいぜい独立戦争（1775-6年）後から19世紀前半までにできた概念であって、それ以前のイギリスの植民地時代はアメリカという国家が存在しない以上、アメリカ文学という概念もなかった。またピューリタニズムの思想は、確かにこうした植民他時代の記録文書、日記、説教の類には顕著だが、それらは文学作品とは言い難い。その後の文学もどちらかと云えばむしろイギリス文学と言うべきもので、そして19世紀後半には早くも超絶主義が主流を占めてしまい、20世紀に入ってからアメリカ文学にはピューリタニズムの跡形もみられない、従って、アメリカには、ピューリタニズムが隆盛な時代にはアメリカ文学がなく、アメリカ文学が出現したときにはピューリタニズムがもはやないといった、「ピューリタニズムとアメリカ文学」といったときの「と」とはそもそも何なのだと、両者の危うい関係性に、さらに水をぶっ掛けるような議論もごぞいます。

そして、そもそも現在のアメリカ合衆国、スペイン語系アメリカ人が総人口の約15%を越し、黒人人口も総人口の約13%に迫って来て、中国語、韓国語、ヴェトナム語、イディッシュ他の外国語を喋る者達が相当に多くなった国に、そもそも「アメリカ文学」とは何なのだ、などといった議論もあるわけです。⁷ その事は取りも直さず、ピューリタニズムは今日どの様に変質して来ている

のか、もしくは、そもそもピューリタニズムというものが現在存在しているのか、といった問題を生じせしめるわけですが、そうした過激でしかも一理ある考え方等も、いま一度視野に収めた上で、やはりこのシンポジウムの目指す、望ましい方向性というものを、今一応定めません事には、どうにもまとまりがつかなくなるのではないかと存じます。

【フォークナー文学と宗教】というやや長い前置きで、フォークナーの作品群をまず巨視的に眺めてみますと、フォークナーが確かに宗教的な作家である事、そして、もう少し狭義には、かなりピューリタニックな作家である事は、恐らくほとんどのフォークナー学者が認める事でありましょう。その辺の事をまず確認してみたいわけですが、その前に「ピューリタニズム」の定義をしておかなければなりません。この事につきましては、他のパネラーの方々は自明の事として、ご自分のお考えを述べておられまして、皆さんもある程度のイメージはお造りになっておられると思いますが、今、ここにその中心的な ideas につきまして、専ら便利の点からその概念を記しておき、そこを中心点として議論が行なわれているのだということを、一応 remind しておきたいと存じます。

【カルヴィニズムの中核的教義】ご承知の如くピューリタニズムにはその中核に Calvinism の考えがあるわけですが、アメリカ語で“Calvinism”という場合、これは極く普通概念になっているようでありまして、Randal Stewart がその著 *American Literature and Christian Doctrine* (1958) 中で、Webster からの定義を記しておりますが、⁸ それは基本的にはカルヴィンの『キリスト教要綱』(1536年)に述べられている有名な5項目について纏めているものでありまして、この5項目につきましては、物の本によっては若干の異同があっても、ピューリタニズムのどの解説書にも出て来るわけですが、それらは箇条書き的に纏めますと次の様なものであります。⁹

- ①「全的墮落, Total Depravity」という観念。
- ②「無条件に選別されているか否か, unconditional election」という事。
- ③「救済さるべき人々のためにキリストが磔けになった, limited atone-

ment] という事。

④「神の恩寵」という観念。

⑤「選ばれたる者は神の意志を遂行する力を持つ」という事。

これらがカルヴィニズムの中核にある考え方であります。元々はこれから派生して来たのですが、現代アメリカ語で小文字で“puritanism”という場合、*Webster, 3rd.* の定義にありますように“strictness and austerity esp. in matters of religion or conduct”という概念になりまして、これでは広義に過ぎ、また余りに曖昧過ぎて、議論の役に立ちません。従いまして、何を以てピューリタニズムの一般的特性とするかという事については纏める必要があるかと思えます。

そしてその事については、いろいろな歴史家、文学研究家、Anthologist 達が少しずつ違った事を言っているわけですが、今回はあくまで tentative なものとしてご参考までに、次の様に私見を纏めてみました。

①三位一体を信じ、何よりも聖書を重んじる。

②人間の「生来的堕落」という事への認識。

③神の庇護の下、現世においても来世においても幸ある運命が開かれるという感覚。

④簡素を尊び、ローマ旧教等の持つ儀式性を否定する。

⑤個人の良心を重んじる。

いずれにしても、こうした基本的な概念が、ある文学作品にどのように現われて来ているのかと考えてみる事は、その文学作品のピューリタン性を考えるときに、手始めとして、まずは一つの簡便な物差しになるでありましょう。

[フォークナー文学の宗教性] さて、私はフォークナーの文学にピューリタニズムの関心からアプローチするとき、一口にピューリタニズムと言ってしまわずに、いまそれを三段階に分けて考えた方が整理しやすいのではないかと考えます。それらは、

(1)フォークナーの宗教性

(2)フォークナーのピューリタニズム性

(3)フォークナーの Fundamentalism への態度，という事でありまして，それらを順次検討して行ってみたく存じます。

まずフォークナーの宗教性という場合ですが，これには Robert Barth が編集しました入門的なアンソロジーがありまして，その本は *Religious Perspective in Faulkner's Fiction* と銘打っておりまして，フォークナーの宗教方面の事を検討する場合には大変食指を動かされます。¹⁰ 内容としましては，まず総論的論文が数編並べられ，それらは「フォークナーと Calvinist の伝統」，「南部のピューリタニズム」，「フォークナーの善と悪」，「フォークナー小説の神学的複雑性」等となっております。その後，主要作について論じたいいくつかの論文が各論として並べられております。编者バースの眼配りは極めてバランスの取れたものでありまして，文字通り「宗教的展望」そのものなのですが，しかし，実は文学作品の論じ方はその先から始まるわけですから，即ち，そこから先が難所となるのでありますから，その点ではこの選集も決して成功しているとはいえません。しかし，逆に言うなら，こうした企画でそうそう簡単に成功されてしまいましたは，私達の出る幕がなくなるわけですから，成功してなくてむしろ安心という感じなわけですが，この選集は「展望」という事に固執する事で，各論においては必ずしも突っ込みが深くなく，いわばフォークナー文学の宗教性についての一般論を提示しているものと判断されます。

【カルヴィニストの考えとストア派の考え方】その内容について，立ち入って詳しく紹介する時間はありませんが，今「ピューリタニズム」と関連で，眼につく事と言えば，

①フォークナーのカルヴィニスト的諸概念（内的墮落，罪，悪）といったもののおさらいがなされ，次いでフォークナーにはカルヴィニスト的伝統と同時に，ギリシア・ローマのストア派的な諸概念も併存してみられるという事の指摘がなされます。ストア哲学では，諦観，禁欲，自由闊達，etc. といった美德が重んじられるわけですが，こうしたフォークナーに独特の美德（勇気，忍耐，

誇り等々)の称揚は、ある意味で「意志と理性で体験に意味を与えようとするストア派的なものである」と考えられるという事。しかるに、カルヴィニストの美德とストア派の美德は、混淆している部分が多く、これらを明確に区分けする事は不可能であるが、フォークナーにはキリスト教的観念と同時にストア派的な考え方もはっきりと見られる、という事。

②フォークナー文学の人物達の行動様式から見て、フォークナーは忍耐とか、苦しむ事とかを、それ自身で美德もしくは理想として考えていたのではないか、という事。

③フォークナーの神観とは、彼のヘミングウェイの『老人と海』論の書評にも見られるように、どちらかという「超絶的な神」のようなものではなかったかという事等でありまして、ここには編者バースの個人的な好み（バースはカトリックの神父）が現われていると思われまます。

いずれにしても、カルヴィニストという宗儀・伝統を追い掛けながら、そこからストア派的なフォークナーの傾向性、受け身の苦しみの重要性、超絶の神といった事がはみ出して来ていると捉えるのが編者バースの論調であります、私などもフォークナーの宗教感覚とは、恐らくそのようなものだったのだろうと、この考えを諾う立場であります。

[フォークナー文学の宗教的な語彙] またフォークナー文学に、いかに宗教的な語彙が多いかということにつきましては、初期の3長編に関してのみですが、George Smartという研究者が作品中に現われた宗教的語彙について一種のコンコードスを作っております (*Religious Elements in Faulkner's Early Novels*)。¹¹ ここでスマートが扱っているのは『兵士の報酬』(*Soldiers' Pay*, 1926年)、『蚊』(*Mosquitoes*, 1927年)、『サートルリス』(*Sartoris*, 1929年)の3作のみですが(彼の調査においては東洋の宗教へのアレルギーは除かれている)、彼はフォークナーが意想外に宗教的語彙を多用している事を示しています。また、同書末の一覧表が示しているところから読み取ると、『兵士の報酬』から『サートルリス』へと経過するに従って、『兵士の報酬』に数多く見ら

れる宇宙や神性といったいわば一般的宗教感覚を表す概念への言及から、確実にキリスト教的信仰および倫理的価値観を表す概念への言及へとその使用頻度に変化して行っているという事が分かります。また軽い冗談口を叩きあうニューオリンズのサロンの集まりを描く『蚊』においては、“Fate,” “Doom”等の語彙は殆ど使用されず、また土着の黒人達の信仰活動へ言及した語彙も使用されていないといった事も分かりまして、これらのデータはフォークナー研究者にとっては、予想通りの結果を提出して来ていると思われれます。

【フォークナー文学のピューリタニズム性】さて、フォークナー文学にいかんピューリタニズムの性格が現われているかという事についてですが、これも前述のスマートの語彙調査にも現われて来ております様に、そうした観点から臨んでみますと、大いにその傾向性が確認できるものと思われれます。例えば、その典型例として『八月の光』(*Light in August*, 1932年)を取り上げますと、そこには主要人物として他ならぬ牧師職にある者達が登場するわけですから、まづもって彼らの宗教家としての習慣や態度が問われるわけです。例えば、祖父の南北戦争時の「英雄的」行為の事が固定観念になっている余り、教会での説教が自己陶醉になってしまい、会衆からすっかり遊離してしまったHightower牧師、日曜毎に別の村に出かけて行つては、そこの教会での説教がルーティンになってしまい、俗世間の事(特に愛情関係の事)に疎くなっている中年のByron Bunchなどが出て来ます。それにJoe Christmasの祖父Doc Hinesは、私生児を生んだわが娘の事を“bitch”と呼ばわり、(カルヴィニズムでいう「非選民」という意味で)女どもと黒人種の事を呪われた性であり人種であると罵ります。また厳格な養父McEachanはジョーに食事も与えず教義問答を暗唱させます。

また『サンクチュアリ』(*Sacntuary*, 1931年)にも、同様に、自然なる性への嫌悪と抑圧的態度、およびその裏返しである変態的で極端に走る性行動がおびただしく現われれます。これらの事は、フォークナーの想像力に訴えるものとしてピューリタニズムの教義、就中、禁欲的で厳格な精神がその中心にあって、

そして異常なる人物達と彼らの行動は、それらをバネとして反動的に小説世界に弾け出たものと解釈する事ができましょう。

その事は私が言わなくても、実際にその通りなのだと思いますが、しかしフォークナー自身は、そうした環境の中にどっぷり浸かっているものの常として、その事に気がついていなかったようで、自らのピューリタン性について、初めて気づかされたとして、フランス人の翻訳者 Maurice Coindreau に次のように告白した事があります。

「『乾燥の九月』の」ご翻訳素晴らしいと存じました……あなたのご論評のこと、有り難く存じております。今、私は性に関して自分がはっきりとピューリタニズムの^り気を持っているのだ（無論アメリカ人の言う意味でなく、語の本来の意味で）と分かりました。私はこれまでそれについて気がついておりませんでした」と。¹²

また、『八月の光』に限らず、フォークナーの作品にはどういうわけか教会での礼拝、もしくは牧師職にある者たちが、重要なシーンあるいは重要な人物としてよく現われて来ます。例えば、処女作の『兵士の報酬』では、小説の締め括りに、落ち着いた黒人教会での礼拝の描写が置かれており、その脇を帰還兵士の Joe Gilligan と、エピスコパル派の牧師 Mahon 師が歩を進めておりますし、『響きと怒り』（*The Sound and the Fury*, 1929年）の最終章では、白人達の空しい怒りと確執とを尻目に、黒人達が黒人教会での説教に恍惚然としている様が描かれています。このようにして、暴力的で性的な事件の多いフォークナー文学は、反面、極めて禁欲的でピューリタニズムの色彩が色濃いのです。そして、そこにスコットランド系、アングロ・サクソン系の白人の圧倒的に多かった、アメリカ深南部の中心的宗教であったピューリタニズムの性質が色濃く現われ出たのも、ある意味では当然の事であったと言うことができましょう。[学校・教会とコミュニティ] しかし今、翻って考えてみますと教会と学校とはアメリカ文学では『トム・ソーヤー』（*The Adventures of Tom Sawyer*,

1896年)の昔から、あるいは Washington Irving の Ichabod Crane (“*The Legend of Sleepy Hollow*,” 1820年)の昔から、常々その舞台の中心に現われます。あるいは、*The Scarlet Letter* (1850年)や*The Blithedale Romance* (1852年)¹³等にも中心的に現われる。つまり基本的に小都市が各地に点在する形で、移住者の集落として人工的に発生して行ったそうした村々の散在した初期アメリカでは、知的で精神的な指導者は、まず牧師か教師であった事、またこれらの開拓者達の手元にあった本と言えば、まずは聖書であった事を考えれば、そこに緊密なコミュニティが存在し、村的エートスを残していた限り、フォークナーに限らず、20世紀初頭までのアメリカ文学が、教会・学校を中心として小説世界を展開して行った事は当然の事であつたであらうでしょう。そして、少し誇大に言いますと、フォークナーの想像力はほとんど旧約聖書をその源流とすると言うことができるかと思われます。フォークナー自身が、聖書、特に旧約聖書を常々愛読していた事は、本人自身が度々明言していますが、¹⁴フォークナー小説のプロット作り、思想等は旧約聖書と切り離す事は不可能ですし、旧約へのアルージョンも夥しく見られます。

[フォークナー文学と旧約との類似] 旧約の何がフォークナーに訴えたかという事、何がフォークナー文学と類似しているかという事は、無論一口には言えません。また旧約聖書の研究はピューリタニズムの研究同様、まことに重厚かつ多岐に渉り、その奥が計り知れません。ところが実際は調べてみると、旧約そのものについての研究と解説は文字通り汗牛充棟ではあっても、旧約世界の描かれ方の特徴は何かといった、文学的興味より発せられたいわば「不謹慎な」問いに答える本はほとんど見当たらないのです。そういうわけで私は、専らフォークナー小説との類縁でその特徴について、自分なりの纏め方をするわけですが、それは①人間関係の複雑さ、登場人物達の感情の生々しさ・厳しさ、行動の大胆さ。②家系の系図への関心(入り組んだ旧約の家族の系譜と McCaslin 家、Sartoris 家等の系図は類似している)。③先祖の悪業や呪いが子に祟るという、因果応報的な考え方。④勸善懲悪的な考え方。フォークナー文学の場合、悪業

がそのまま放置される事はなく、何らかの形で天罰といった形で、天秤のバランスが保たれる。たとえそれが、同一作品の中でそのようにならなくても、フォークナーの全作品群の中でそのようになって行く。⑤人間存在は「塵から塵へ」という存在だという考え方。例えば、それが端的に表わされるのは、Snopes三部作の最後の作品の『村』（*The Mansion*, 1957）の末尾の描写でしょう。そこでは生きとし生ける者達が、遂には土に戻り、各々が大地の中で自由を回復するという事が感動的な筆致で描かれていて、そのリズムや調子も、朗々として旧約的なものと考えられます。¹⁵

私は、このようにして、フォークナーは自分の世界を構築する場合に、旧約のエピソード、思想、イメージを、パラレルやアイロニカルな形で自作に取り込んだと考えております。その点、ある意味ではフォークナーの想像力の枯渇を救ったのは旧約であった。そして、旧約からフォークナーはピューリタニズムのエッセンスを抽出したのだと考えるわけです。それらは無論、必ずしもすべてがピューリタニズムの考えというわけではなくとも、その中から最も激しく純粋な形で、フォークナーに訴えて来たものは、苛酷で厳格で、運命の意識に満ち満ちたピューリタニズム的なものではなかったかと思うわけです。¹⁶ 私が先ほど上げた、ピューリタニズムの持つ諸特徴、および旧約とフォークナー作品との比較で述べました諸特徴等と照らし合わせたとき、そうではなかったかと思うわけです。

では、フォークナーの神観はどのようなものかといいますと、それは前述のバースも述べておりますが、彼のヘミングウェイの『老人と海』の書評に中などに見えまして、そこでフォークナーはヘミングウェイはそれまでの自己のみを関心の中心においていた強者の倫理思想から、やっと他者をも思いやる“pity”や“compassion”の感情を体得していると言っていますが、¹⁷ それはどちらかというとならばフォークナーの有名なノーベル賞受賞演説にも見られるような、同情、憐れみ等を中心とした、他者を思いやる穏やかで清朗なもののようにわれます。しかし、作家の一般的宗教観を述べる事は、本日のテーマからそれますので、

その事はここで止めておきたいと存じます。最後にフォークナーの Fundamentalism への態度の持ち方について述べたいと思います。

[フォークナーと Fundamentalism] “Fundamentalism” とはアメリカの場合、20年代、30年代、即ちフォークナーの作家としての the major years と重なる時期に最も猖獗を極めた、聖書の字句をそのままに受け取り信じるといった反動的で狂信的な宗教的態度であります。それはいわば教義の面で極端に走ったピューリタニズムの一形態の現われとも言えます。¹⁸ これは、例えば『八月の光』のジョー・クリスマスを取り巻く、激しく極端な狂信的な人々の態度に典型的にそれが見られるわけですが、しかし勿論フォークナー自身がそのような精神構造を持っていたと言うのでなく、彼がむしろそれに対して否定的な態度を取っていた事は確かです。そして、私見によると、フォークナーがこうした宗教的雰囲気、過激な宗教的態度を描かなければならなかった内的必然性は、彼の側にはあまりなかったのではないかと思うのです。むしろ、フォークナーはそうした自己の周辺に渦巻く当時の熱狂的態度を、冷静に、現在の自分を取り巻く社会的異常現象と見て、それを作品のテーマとしうると考えたのでしょう。つまり、この事は小説家としてのフォークナーが、時代の流れ、風潮を見るに明敏であった一つの証明と考えられる、と。

例えば、例の物議を醸した『聖域』のモダンライブラリー版（1932年刊）の序によりますと、フォークナーは「何が当節のミシシッピ州の風潮であるかと考え、その答えを出し、その小説を書いた」と言っていますが、この「何が当節の主たる風潮か」と問いかけ、そこから小説のテーマを発見し、それに取り組むという姿勢は、「問題小説」に挑む作家達のいわば嗅覚、触角のなさせる術であって、フォークナーの場合、その方面へのそれは誰よりも鋭かったのだと思われまます。フォークナーは、いわば “trend watcher” として、当時の popular culture や、それよりさらに下層のいわゆる underworld の習俗についての関心も深く、そうしたところまで含めて、当代の風潮、雰囲気を捕まえるという事に極めて alert であったと言えます。そうした傾向性を持った作家

にとって、1925年のいわゆる“Monkey Trial”に象徴されるアメリカ全土を席卷したファンダメンタリズム的精神風土が、作品の題材として浮かび上がって来た事は当然の事であったであります。

こうしたフォークナーが優れて“Trend Watcher”であった事は、彼の小説のあちこちに散見される当時の風潮を切り取る、いわば時代批評家としての彼の筆致に明らかです。例えば『兵士の報酬』の次のような文章です。

まもなく町の物好き達も〔傷病兵を見に〕訪れて来なくなった....他に考えたり喋ったりする事が多かったからだ。時はまさにKKK団の発生期だったし、首府ワシントンでは民主的な紳士ウィルソン大統領の没落期だった。(第8章第2節)¹⁹

あるいは1929年に書かれました『聖域』はその舞台が1929年春に設定されておりますが、そこには、20年代のほとんどの重要な流行・風潮がすべて描き込まれております。例えば、帰還した傷病兵の問題は『兵士』（1926年）で正面切って描かれていたので除くとしても、CecilyやMargaretに代表されるフラッパー的、ないしは「新しい女」のsensitivity、ジャズ・エイジとモダニズムを思わせるようなポパイの服装、禁酒法下の密造酒造りの者達の巢窟の描写、反ユダヤ主義、それにリンチによる殺人等々です。²⁰

この様に、フォークナー文学は南部の地理的風物の描写と同時に、時代の先端を行くファッション性をも併せ持った魅力を持っていると言う事ができます。つまり、フォークナーには新奇なもの、激しいもの、極端なもの、グロテスクなものへの嗜好性があって、ファンダメンタリズムは当時の風潮であるとともに、こうしたフォークナーの嗜好性にもよくマッチしたのだと言えます。

フォークナーの『聖域』についてAndré Malrauxは「探偵小説にギリシア悲劇が加わったもの」と名言を吐いておりますが、²¹ その伝に倣うと『八月の光』は「ファンダメンタリズムと、フロイドの幼少期体験および抑圧説と、南部の伝統たるゴシック小説の三角形の中で描かれた」といえるかと思えます。

私はかつてフォークナーの家、Rowan Oakを訪問した事がありますが、彼の二階の寝室には、その枕元に雑誌の *Time* が乱雑に積まれており、その一番上の方に1962年5月31日に処刑された Eichmann の *Time* 誌特集号を認めました。それは恐らく6月の号だったはずですが、フォークナーは翌7月の6日には死去しておりますので、彼は、市民として、勿論当然の事でしょうが、ミシシッピの片田舎に住まいながらも、アンテナを高く張り、世界の動きに熱心に反応していたのだと思われます。そうした高感度のアンテナによって、彼は『八月の光』を執筆した際にも、当時のファンダメンタリズム的狂熱を時代の風潮として強く感じて、それに、鋭く反応しそれを小説の題材として取り上げたのでしょう。

フォークナー自身はプレスビテリアンですが、その感覚は無論ピューリタンのそれであったと思われます。フォークナーの小説を読みますと、プロテスタントの各宗派への微妙な思い入れがよく描き分けられております。例えば、信仰心が揺れ動き、弱々しい相対主義的言辞を吐く Mahon 師は Episcopal ですし、Hightower は厳格を以て鳴る Presbyterian, Ruby とその子を追放するジェファソンの町の人達は南部に圧倒的勢力を誇る Baptist 達ですし、Cecily Saunders 家はプロテスタントが圧倒的な南部ジョージアにあって、カトリックのために肩身が狭かったと書かれております。こうした宗教上の各宗派への微妙なコメントは、フォークナー小説を宗教的方面から、風俗小説として読むときに一つの醍醐味となりえましょう。またフォークナーは常々、自分がクリスチャンである事を強調し、自分がよく聖書を読んでいる事を知らしめようと努力した節があります。²² このように、フォークナーを宗教的側面から、またピューリタンの側面から見てみる事はかなりの収穫を予想させますし、その文学の理解にいま一つのディメンションを加えさせ、その陰影を一層深く見えさせるものと思われます。

そうした方面からのフォークナー作品の各論につきましては、幾人かの人達が優れた論文を出されています。²³ 私もいつかそうした事をやってみたくと存

じますが、今回は、各論でなく総論の方を、そしてフォークナー文学への一つの断面図を提出するといった程度の事を話させて頂きました。この様に退屈な話を、アメリカの初期ピューリタンの如く耐え忍び、最後までご静聴くださいませ、誠に有難うございました。

註

1. 松山信直「ホーソンとメルヴィルの文学」『ピューリタニズムとアメリカ』南雲堂 1969年「“The Modern Job”の行方—ホーソンと『ヨブ記』」『同志社大学英語英文学研究』4 1977。
2. そうしたものに Joan Phelan, *Puritan Tradition and Emily Dickinson's Poetic Practice*, Ph.D.Dissertation, Bryn Mawr College, 1972 等がある。
3. Flannery O'Connor, *Mystery and Manners: Occasional Prose*, ed. Sally and Robert Fitzgerald, Farrar, Straus & Giroux, 1969; Flannery O'Connor, *The Habit of Being*, Farrar, Straus & Giroux, 1986.
4. 同様な事を Bleikasten は「彼女はカトリック信者だが、カトリックの小説家とは言えない」と述べている。Cf. Andre Bleikasten, “The Heresy of Flannery O'Connor,” in Melvin Friedman and Beverly Clark, eds., *Critical Essays on Flannery O'Connor* (G.K.Hall & Co., 1985), p.157.
5. Per Seyersted, ed, *The Complete Works of Kate Chopin*, Louisiana State U. Press, Baton Rouge, 1969.
6. William Spengemann, *A Mirror for Americanists: Reflections on the Idea of American Literature* (University Press of New England, Hanover, 1989).
7. 『現代アメリカデータ総覧 1989』合衆国商務省センサス局編 鳥居泰弘監訳 原書房 1991。本書によると、1990年現在の推計では日系72万人、中国系81万人、韓国系35万人、ヴェトナム系25万人。
8. Randall Stewart, *American Literature and Christian Doctrine*, Louisiana State U. Press, 1958.
9. Rod Horton and Herbert Edwards, *Backgrounds of American Literary Thought* (Prentice-Hall, Inc., 1974) の“Puritanism”の項よりの抄・意訳。

10. Robert Barth, S.J., ed., *Religious Perspectives in Faulkner's Fiction: Yoknapatawpha and Beyond*, U. of Notre Dame Press, 1972.
11. George Smart, *Religious Elements in Faulkner's Early Novels: A Selective Concordance*, U. of Miami Press, Coral Gables, Florida, 1965.
12. Joseph Blotner, ed., *Selected Letters of Wiliam Faulkner* (Random House, 1977), pp.63-64. 遅くとも, *Absalm, Absalom!* の執筆時期 (1935年以降。出版は1936年) においては, フォークナーは明らかに自己および南部人の事をピューリタンとして意識的に把握しており, 作品中 “Puritan” あるいは “Puritanism” の語が多用される。
13. モデルとなったブルック・ファームの正式名称を “*Brook Farm Institute of Agriculture and Education*” と言う。Cf. Linsay Swift, *Brook Farm: Its Members, Scholars, and Visitors*, The Citadel Press, 1973.
14. James Meriwether and Michael Millgate, eds., *Lion in the Garden: Interviews with Wiliam Faulkner, 1916-1962* (Random House, 1968), pp.110, 112, 169, 197, 217, etc.
15. 小山氏もその著の締括りとして引用されている感動的な箇所。小山敏夫『ウィリアム・フォークナーの短篇の世界』山口書店 1988 p.362。
16. フォークナーは旧約聖書について次のように述べている。“...to me the Old Testament is some of the finest, most robust and most amusing folklore I know.... I read the Old Testament for the pleasure of watching what these amazing people did, and they behaved so exactly like people in the 19th century behaved. I read that for the fun of watching what people do.” Cf. *Lion in the Garden, op.cit.*, p.112.
17. William Faulkner, *Essays, Speeches and Public Letters* (Random House, 1965), p.193.
18. 例えば人種偏見に関するファンダメンタリスト的態度に対して, フォークナーは次のように述べた事がある。“There are certain ignorant people that can be lead to believe that one man is better than another because the Christian Bible says so.” Cf. *Lion in the Garden, op.cit.*, p.183.
19. *Soldiers' Pay* (Liveright, 1954), pp.280-281.
20. Cf. Loren Baritz, ed., *The Culture of the Twenties* (The Bobbs-Merrill Company Inc., 1970). この本の中で取り上げられているトピックを拾えば Prohibition, KKK, Immigration Restriction, the Monkey Trial, The Flapper's Mentality, the Jazz Age 等々である。

21. André Malraux, "A Preface for Faulkner's *Sanctuary*," rpt. in Robert Penn Warren, ed., *Faulkner: A Collection of Critical Essays* (Prentice-Hall, Inc., 1966), p.274.
22. フォークナーは愛読書について尋ねられると、旧約聖書とシェークスピアへの言及を忘れなかった。*Lion in the Garden*, *op.cit.*, p.251.
23. 寺沢みづほ「ピューリタニズム性とアイデンティティ―『八月の光』考」『和光大学人文学部紀要』19 (1984), pp.187-208等。しかしピューリタニズムから正面切ってアプローチをした論文は意外と少なく、そのほとんどは他の件との関連で言及される程度である。